

## 松本清張の『点と線』におけるナラティブとテーマ

アンナ・ヤルホフスカー\*

### 1. はじめに

一般的に探偵ジャンルとは、ある程度、所定の構造を守った、固定構造的なジャンルだと思われる。このジャンルの作品は、お互いに対していくつかの変わらない成分を持っており、いわゆる「モデル読者」、つまり想定される読者に期待されている構造を事前に提供している。

探偵ジャンルは非常に図解的なジャンルだと言える。探偵小説の形はある程度既に定義されていて、変化するのは特別なストーリーの設定や細部のみである。例を挙げると、すべての探偵小説では犯罪が起こり、刑事が紹介され、それに捜査が続く。しかし犯罪がどのように起こったのか、刑事の人物像、犯罪の動機や様々なストーリーの詳細は常に異なっている。このようにジャンルの形に厳しいルールがある探偵小説は、筋書きに関係のない出来事・主人公の考え・登場人物の関係性などに多くのスペースを与えるものではない。例えばPaul Finnertyは「Why do we read detective stories?」で以下のように述べている。「探偵小説では中心となる筋書きのみに焦点がおかれる必要がある。推理から逸れたすべての出来事あるいは特徴は、筋書きに関係性を持たなければならない」(Finnerty, 2009-2010)。さらにVan Dineも「The World's Greatest Detective Stories」において以下のように述べている。「探偵小説の筋書きに関係ない、すべての精神的な感情への言及は見当違いの

効果をもたらす。例えば、最高の探偵小説にはいかなる恋愛要素も見当たらない」(Van Dine, 1931)。つまり筋書きに関連しないすべてのストーリーや登場人物の感情などはジャンルを弱め、破壊するおそれがある。

これらの前提をもとにして考えれば、探偵小説を通じて複雑なテーマ(例えば社会的な問題など)を表そうとする場合、ジャンルの形式上、テーマは不要とされてしまう問題が出てくる可能性があるのではないか。本論文では、探偵小説において不要とされる要素である、「筋書きに関連しない部分」に含まれるテーマ性がジャンルのルールの要求に沿っている限り、ジャンルは破壊されないという仮説をたてた。その仮説を立証するため、本論文では、松本清張の『点と線』におけるテーマはナラティブにどのような影響をあたえるのかについて分析を行う。

これらの前提を基にして考えると、探偵小説において、社会的な問題などの複雑なテーマを取り上げることは、ジャンルを弱める可能性があるのではないだろうか。しかし、本論文では、探偵小説において表現されたテーマは、ジャンルのルールの要求に沿っている限り、ジャンルを破壊することはないという仮説を立てた。この仮説を立証するため、本論文は、松本清張の『点と線』におけるテーマはナラティブにどのような影響を与えるのかについて分析を行った。

\*カレル大学院生

## 2. ナラティブにおけるストーリーとディスクール

物語学におけるナラティブは、ストーリーとディスクールという2つの部分によって構成されている。ストーリーとは、物語の中で登場人物・背景・出来事などが描写されている、ナラティブの第一の部分である。ディスクールとは、物語がどのように語られているかということを示す、ナラティブの第二の部分である。ここでは、特にナラティブにおけるストーリーに着目する。登場人物が紹介され、さまざまな出来事が起こる余白としてのストーリーと、テーマとの関係を分析する。

## 3. 探偵小説におけるテーマと『点と線』の粗筋

探偵小説におけるテーマはあまり表示されることはない。一般的な例を挙げるなら、シャーロック・ホームズのようなクラシカルな探偵小説では、謎の解決と犯人の逮捕のみが中心となる。しかしながら、捜査以外のさらに重要なテーマが現れる探偵小説もある。

日本の場合、社会問題につながるテーマに関する文学の流れは60年代の初頭に確立された、「社会派」が代表的であり、松本清張による探偵小説は、この「社会派」に含まれる。「社会派」に属する探偵小説の作家たちは、人間味を持った刑事やリアリティーに富んだ捜査を描写し、ストーリーを通じて社会にける様々な不公平を指摘した。Saito (2007) は、「松本の探偵ジャンルへの貢献は、それまで非現実的だった犯罪の描写や登場人物の関係に社会的なリアリティーを取り入れたことである。松本は探偵小説の世界に想像しうる人間関係と社会的な問題を取り入れ、因習をやぶった（筆者訳）」と述べている。

以下に分析対象の紹介として『点と線』のストーリー上、重要な出来事をまとめる。

事件は昭和32年、福岡市の香椎という小さな町の海岸で男女の死体が発見されたことから始まる。亡くなった男は官僚で、女は料亭の女中である。地元警察はこの2人を心中と断定するが、鳥飼刑事はこの男女の死に疑問を持つ。当時、死亡した官僚の男の部署には、汚職の疑惑がもたれていた。この汚職と心中の関係を調べるため、東京から三原刑事が福岡に送られた。

事件当日は、香椎の駅前を男女が歩いており、更に東京駅で停車中の電車で二人が乗っていたという目撃情報もあった。東京駅で目撃された電車は15番ホームに停車していたが、目撃者は13番ホームから二人を見た。この2つのホームの間には列車が行き交っており、13番ホームから15番ホームに停車している電車は一日に4分間しか見通すことができない。三原刑事の推理は、目撃者は意図的に作り上げられたに違いないというものである。

容疑者は安田という人物である。安田は汚職疑惑のある某省に関係している業者の人間である。三原刑事は安田を疑うが、安田のアリバイは完璧だった。心中事件のあった日、安田は北海道に出張していたのである。しかし三原刑事の捜査によって安田のアリバイは崩れたのだった。三原刑事の捜査によると、心中したと思われていた男は、官僚汚職の犠牲者であり、一方の女は、安田の愛人だった。また、犯人は安田一人だけではなく共犯者がいることも判った。それは安田の、結核を患う妻だった。病気の妻は時刻表を使った犯罪を計画したのである。

事件の真相は判らないまま、安田夫婦の心中により物語はあつけない結末を迎える。最後は三原刑事から鳥飼刑事に宛てた手紙で小説は終わる。

## 4. ナラティブとテーマについて

探偵小説は図解的なジャンルであるため、ナラティブはいくつかの部分に分けることができる。

本論文では『点と線』のナラティブを「犯罪の準備」「犯罪」「捜査」「事件の解決」「罰」という区分で分割した(グラフ1)。

一般的にテーマは二つの制約を受ける。一つはナラティブにおいて表現されなければならないというものであり、もう一つは、その作品のテーマについて読者が読後に共鳴するようなテーマでなければならないというものである。つまり、テーマはナラティブを助け、ストーリーを深める手段あるいは文学的な単位である。

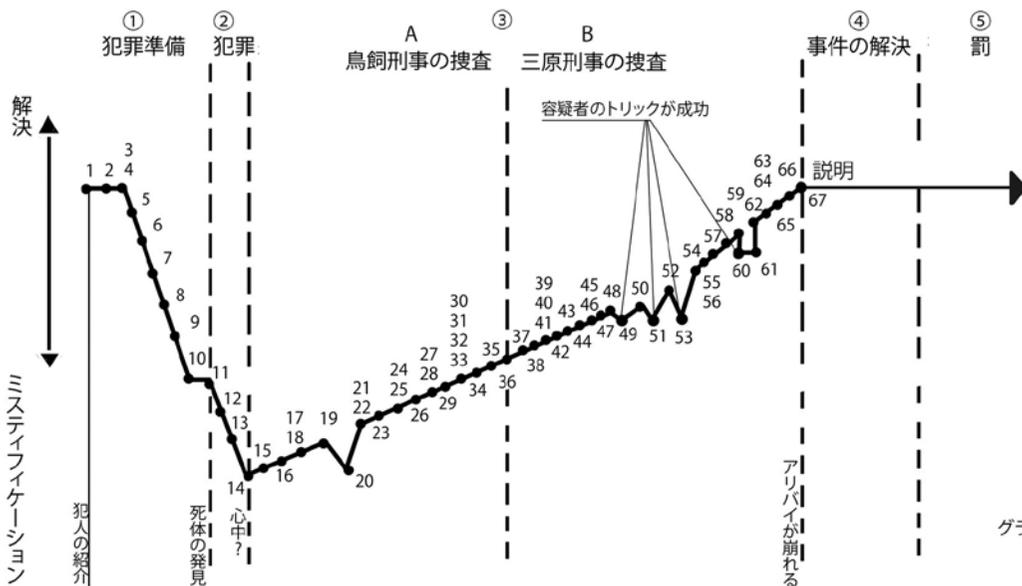
テーマは、例えばダイアログ、登場人物の描写、語り手の発表といった、いくつかの方法で表現されている。『点と線』のナラティブの構造を分析するために、まず本作品のナラティブを五つの部分に分けた。第一の部分は犯罪の準備、第二は犯罪そのものである。第三の部分は捜査である。二人の刑事が担当したことから、3Aと3Bという二つの部分にわけた。鳥飼刑事の捜査では、この事件は心中だったという仮説に強い疑問を抱き、三原刑事の捜査では容疑者のアリバイ崩しが中心になっている。第四のナラティブの部分は犯罪がど

のように起こったかを説明する。最後の部分は一般的には罰を描写するが、『点と線』の場合は罰の要素はあまり見られない。犯人は自殺し、汚職事件に関わった人々は処罰を受けていない。このことこそは社会的な問題に関連していると思われる。

『点と線』は探偵ジャンルの小説であるため、犯人は最初からわかっていて、読者は刑事の捜査の進行を追っていく。捜査の主な目標はアリバイを崩すことである。捜査の間に刑事が容疑者のトリックに何度かだまされるが、容疑者が結局犯人だということは第三の部分の終わりに証明される。

### 5. 『点と線』のナラティブの構造

次に、より詳しくストーリーを分析するために、ストーリーの中で重要だと思われる出来事に、小説に出てくる順にそれぞれ1から67までの番号をふった。グラフでは黒いラインは、ストーリーを追っている。1番から14番までは、犯人のミスディフィケーションに沿って進む。14番から67



グラフ1

グラフ 1

番までは、事件の解決に向かう捜査を象徴している（グラフ1）。本論文では重要な出来事について下記に説明する。

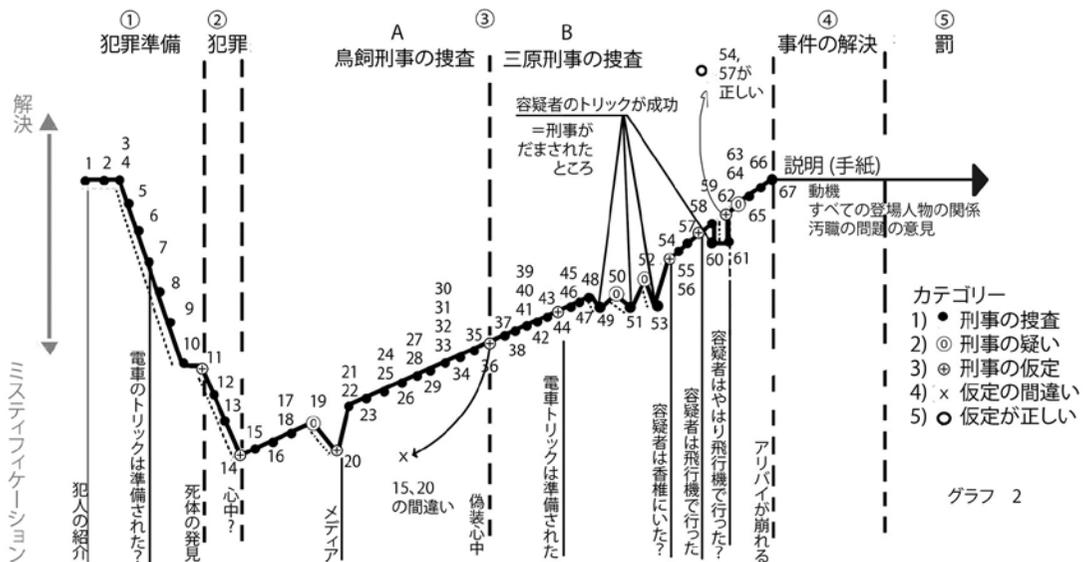
第一のナラティブの部分では、犯罪の準備、容疑者あるいは犯人と被害者を紹介する。そして同じ第一のナラティブの部分では犯罪の準備として有名な電車のトリックも見える。第二の部分は死体の発見から始まって、二人が心中したのではないかという仮定で終わる。第三の部分は二つの部分に分かれている。一つめの鳥飼刑事の部分では、20番の心中という誤った仮定はメディアを通じて、再びくりかえされるが、捜査に影響を与えることはあまりない。そして、この部分は、犯罪は偽装心中だったという仮定で終わる。次の三原刑事の下位部分では、アリバイを崩して、真犯人が判明する（グラフ2）。ナラティブの構造から見て興味深いのは第三の部分であり、この論文では第三の部分を中心に分析する。

第三の捜査のナラティブの部分で周期的に現れるいくつかの出来事を五つのカテゴリーに分類した。一番目は刑事の調査、二番目は刑事の疑

い、三番目は刑事の仮定、四番目は仮定の間違ひが明らかになること、そして五番目は仮定が正しかったと明らかになることである。刑事が情報を集め、何かを疑い、ある仮定をだす。ある仮定を出す前の情報を集めるところと疑いは何回も繰り返されている。それぞれの仮定がなされたところはストーリーにおいて重要な点である。グラフで「⊕」のマークでマークされた点は仮定、「⊙」の点は疑い、黒い点は調査を象徴している。点線の部分は捜査を混乱させる犯人の行為、または捜査の混乱を表す（グラフ2）。

第四の部分では、手紙を通じて、犯人の動機や共犯が明らかになる。犯罪の説明の第四のナラティブの部分はアリバイが崩れる直後に語られる。今まで分からなかった出来事と登場人物の関係は時系列的に語られる。すべてのストーリーの概念的なタイムラインはこの部分で明らかになる。

ストーリーにはいくつかの特徴がある。例えば二人の同等な刑事の存在はかなり珍しいと言える。松本清張はストーリーを二つの登場人物（鳥飼刑事と三原刑事）、背景（香椎、東京）に分けた。



グラフ 2

これは『点と線』というタイトルの「点」の導入であると考えられる。「線」は、心中と見られる事件と、汚職事件という最初は無関係に見えた2つの事件のつながりである。Saito (2007) が述べているように『点と線』がもし伝統的な探偵小説だったら、鳥飼刑事は恐らくワトソンのような登場人物として登場し、三原刑事はシャーロック・ホームズのような主人公になる可能性がある(筆者訳)。しかし、『点と線』においては、二人の刑事は平等であり、それぞれの捜査やさまざまな登場人物が描写された後で事件は手紙によって明らかになり、読者にはあまり釈然としない印象を与える。手紙を通じた解決の描写も一つのストーリーの特徴である。そして松本は、二人の刑事を人間味を持った登場人物として描写しようとしたため、ストーリーにあまり関係ない登場人物の日常生活も非常に多く記述されている。

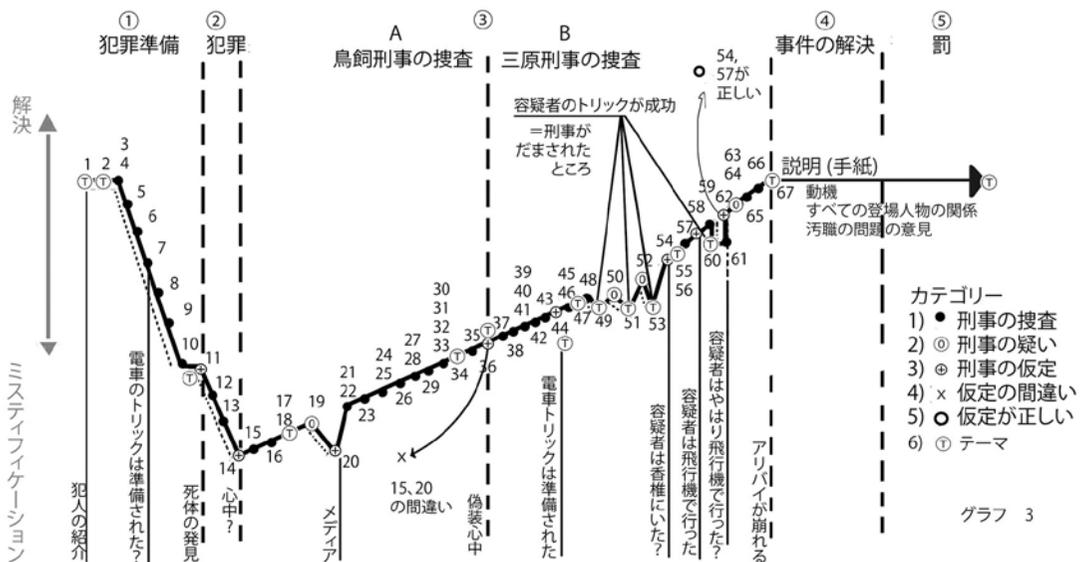
## 6. 『点と線』におけるテーマ

『点と線』のテーマは、汚職は最終的に人生を

破壊する社会的現象だということである。グラフ3ではテーマは「㊦」というマークで表示されている(グラフ3)。

『点と線』におけるテーマはいくつかの方法で描写されている。1番、2番、17番、43番などではテーマは登場人物の性格描写を通じて表されている。この性格描写は当然捜査の対象なので、新しい事実・情報は徐々に描写される。よって、最初から容疑者は不正事件が進行している某省に関係がある業者であることが分かるが、詳しい情報と登場人物の関係は捜査が進むにしたがって、分かるようになる。テーマを表現するために、登場人物の社会的な背景も非常に重要だと思われる。Tomáš Kubíček (2013) は「登場人物の性格などを評価するのに、登場人物の社会的な背景や、他の登場人物に対する態度などは非常に重要である」(Kubíček, 2013) と指摘している。テーマは特定の出来事と登場人物の対話にも現れる。例えば34番では被害者の同僚が逮捕されたことが登場人物の対話のおかげで判明する。

第四のナラティブの部分で、テーマは一番多く



グラフ 3

現れる。ここは三原刑事が鳥飼刑事にあてた手紙によって事件を説明し、犯人の共犯を明らかにし、汚職について様々な自分の意見や考えを伝える部分である。ここでは結局犯人の動機が出てくる。それは重要な汚職の証人を消す必要があったのである。手紙を読みながら、読者は難解な某省での人間関係を想像する。第四のナラティブの部分ではジャンルは複雑なテーマに脅かされていない。捜査は既に終わったので、主人公の個人的な意見はナラティブを混乱させることはない。しかも主人公が書いた手紙を通じて、松本は汚職に関する自分の意見をより簡単に表すことが可能となった。

第五の部分では処罰はない。例えば重要な某省で働いている官僚は処罰を全く受けていない。だからこそ第四と第五の部分ではテーマは強く共鳴している。

一番複雑なナラティブの部分は第三の捜査の部分である。第三の部分ではテーマはジャンルを混乱させないように、いくつかの登場人物の描写といくつかの出来事だけで描写されている。特に20番と36番において、テーマは大変興味深い形であらわされている。20番はメディアの介入である。そして36番ではテーマはナラティブに非常に重要である。ここで三原刑事は心中が某省での事件に繋がっており、心中ではなく偽装心中だと判断する。この36番で、テーマは、核心的な出来事背景に現れる。

49番、51番、53番と60番におけるテーマの存在も面白い点である。すべての点は刑事が犯人のアリバイにだまされた点である。そこで刑事は自分の仮定を検証することができない。53番では、テーマは明示的に表示される。ここでは、容疑者の名前が、石田という官僚の名前と一緒に乗船券にかいてあることがわかる。

同じく重要なのは石田という官僚が容疑者のアリバイを確認する56番である。49番、51番、60番ではテーマは暗示的に表示される。捜査はうまく行かないが、その理由は犯人のトリックにあり、

犯人のアリバイを完全に崩すことは第四のナラティブの部分までできない。テーマは勿論アリバイが崩れる67番にクライマックスに達する。あとはすべてのモチーフが繋がることになる。

## 7. 結論

『点と線』は、社会派に属する作品であり、社会的問題をテーマとして扱った作品である。しかし、本作品は、困難な社会的状況に対処するための提案を提供しているわけではない。すべての汚職は抽象的問題でしかない。汚職の極端な結果が紹介されるが、本作品は汚職のような社会問題の解決法を提案しているわけではない。

結論としてテーマはどのような条件の下でナラティブに影響を与えるのかをまとめる。

作家が、捜査を描写していく中で、例えば、作家が汚職についての自分の意見を表明するとか、刑事たちが生きている社会について詳しすぎる描写をおこなうなど、テーマが余計に強調されたとしたら、それは読者をストーリーからそらせ、最終的にジャンルを弱めると言えるだろう。だが『点と線』の場合はこのような問題は起きていない。

本作品において、テーマは、ナラティブを進め、結果としてナラティブに貢献していると言える。テーマが大きく前面にでることなく、ナラティブの一つの部分として留められている場合は、探偵小説におけるテーマとしての役割を果たしうることが明らかになった。

## 参考文献

- Finnerty, Paul. "Why do we read detective stories?." *INNERVATE: Leading Undergraduate Work in English Studies* 2, 2009-2010 (2009-2010): 80-86.
- Kubiček, Tomáš, Jirí Hrabal, and Petr A Bilek. *Naratologie: strukturální analýza vyprávění*. V Praze: Dauphin, 2013.
- Matsumoto Seichō. *Ten to sen*. Kaihan. Tōkyō: Shinchōsha, 2003.

- Saito, Satomi. *Culture and Authenticity: The Discursive Space of Japanese Detective Fiction and the Formation of the National Imaginary*. The University of Iowa, 2007.
- Van Dine, S.S. *The World's Greatest Detective Stories*. New York: Blue Ribbon Books, 1936.